

スラブ語比較語順論

— 前倚辞の配列と機能を中心として —

本 城 二 郎

0. 序論：スラブ語の類型的特徴と語順

スラブ語は、屈折タイプに属する無標SVO言語で、格による文法機能表示の結果、一部固定位置の前後倚辞を除き、所謂自由語順という類型論的特徴を持っている。

1. 主要語順原理：

FSP原理とリズム原理 (Wackernagelの法則) と文法原理 (要素隣接の法則)

FSP原理とは、文要素をそれが文中で果たす伝達機能 (FSP機能) に応じて配列される語順原理で、無標ではTh(テマ)-Tr(トピ)-Rh(レマ)語順*を基本配列とする。その際、文中での各位置にFSP機能が付与される語順をFSP化語順、逆にFSP機能を持った要素 (FSP要素) に応じて文位置が決定される語順をFSP語順と呼ぶ。文法原理とは、文要素をそれが文中で果たす文法・統語機能に応じて配列される語順原理で、S、V、O/C等 (文法要素) の多様な連鎖を個別言語的に無標の基本配列とする。同様に、文化化語順および文法語順に下位分類される。リズム原理とは、文要素の韻律的特徴 (特に強勢の有無) から配列される語順原理で、印欧語に本来的な文の強-弱 (/×) 始まりの第二要素 (群) が前倚的 (および後倚的) に文中で (決まった順序で) 定位置を占める現象を規定することから、前倚辞の法則 (またはWackernagelの法則) とも呼ばれている。第二位置は、通常弱強勢の担うTh機能 (およびTrPr機能) を付与されることからFSP化語順に含まれる。文法要素の配列は、隣接の有無に応じて下位分類されることから、特に隣接が文化化される場合を要素隣接の法則と呼び、文法原理に含まれる。スラブ語の語順原理の中で特に注目すべきは、客観的語順Th-Rhvs. 主観的語順Rh-Thの機能的対立であり、前者の無標性および後者の有標性は体系的に存在すると見なされる。

(注) * Th-Tr-Rh語順の詳細は本城2001参照。各要素の細分化は以下の通りとなる。

FSP基本配列：ThPr-ThPro-Th-DTh-TrPr-TrPro-Tr-Rh-RhPr

2. スラブ語の主要語順と語順機能

スラブ語の主要な文要素の文法的語順 (構成) は、無標つまり文脈独立の条件下で、他動詞文はSVOを自動詞文はVSを示す。現実発話の段階つまり有標・文脈依存の条件下では、それは多様な語順バリエーションを現出する。それらは、通常文要素の現実的構成

つまり F S P 語順原理としての客観的 Th-Rh 語順 vs. 主観的 Rh-Th 語順の対立を反映したものと見なされる。他方、一部の単音節・二音節の小詞や再帰代名詞や人称代名詞など短い要素つまりこの場合小詞一代名詞的前倚辞は古スラブ語時代から引き継いだ固有の体系を構成し、文内での位置・語順が固定されている。後の発達による助動詞の前倚辞と共に、それらは、印欧語の文リズム語順原理の観点から、強勢のある文第一要素に寄りかかる無強勢要素(群)を構成し、文の第二要素位置(Wackernagel位置)に配列される。西スラブ語やスロベニア語やセルビア・クロアチア語は、固有の豊富な格の保持により、主要な文要素は語順の文法・統語機能つまり文法化語順の制約から開放され、整合的 F S P 化語順*を示す。それと平行した前倚辞体系の発達により、Wackernagel 位置の F S P 機能(つまり ThPr 代名詞の前倚辞および TrPr 助動詞の前倚辞)が確定され -前倚辞の F S P 化-、一貫した F S P 化語順(DTh-x*:ThPr/TrPr-Tr/Rhつまり Th-Tr-Rh 語順)を実現している。それに対して、ブルガリア語・マケドニア語は、格の衰退の結果、主要文要素は通常文法機能の制約を受け、無標文法化語順 SVO/V S を示すのと平行して、(バルカン言語連合現象の一つ)接辞化後置冠詞やさらに人称代名詞の前倚辞の重複使用および主軸語動詞への隣接化(つまり前後倚辞化)への傾向を発達させることにより、斜格つまり与格・対格代名詞的前後倚辞と共指示の名詞的要素が移動可能となり -前後倚辞の文法化-、これら二つの相補的手段により現実発話の要件つまり F S P 語順(DTh-x:ThPr-Tr/Rhつまり Th-Tr/Rh 語順または Tr/Rh-x-DThつまり Tr/Rh-Th 語順)を実現している。東スラブ語は、豊富な格を保持する一方、前倚辞の衰退(例えば、ロシア語における再帰代名詞の動詞接辞化や一部条件法小詞 *by/by* の残存を除く助動詞の前倚辞 *byt/byt'* の衰退)および可動アクセントの発達により、Wackernagel 位置つまり F S P 移行要素 TrPr の形式的独立が消失し -前倚辞の接辞・小詞化-、その結果客観的語順(Th-Tr/Rh 語順) vs. 主観的語順(Tr/Rh-Th 語順)の語順機能的対立が中和され、F S P 化語順の多様なバリエーションが実現されることになる。

(注) x は前後倚辞要素をさす。

スラブ語の前後倚辞配列には以下の傾向が確認されている。(Siewierska(1998)参照)

Cz.: li > 助動詞 > 再帰代名詞 > 与格代名詞 > 対格代名詞 Slk.: 条件法 by > 助動詞 > 再帰代名詞 > 与格代名詞 > 対格代名詞

P.: 与格代名詞 > 再帰代名詞 sie > 対格代名詞 (> 属格代名詞) USor.: li > 再帰代名詞 > 与格代名詞 > 対格代名詞

Slv.: 小詞 > je を除く 過去助動詞/再帰代名詞 > 与格代名詞 > 対格代名詞 > 属格代名詞 > 未来助動詞 > je

S-Cr.: li > je を除く 助動詞 > 与格代名詞 > 対格打代名詞 > 属格代名詞 > 再帰代名詞 > je

B.: li > je を除く 助動詞 > 与格代名詞 > 対格代名詞 > 再帰代名詞 > je M.: 否定語 > 助動詞 > li > 与格代名詞 > 対格代名詞

西スラブ語 - スロベニア語 - セルビア・クロアチア語タイプ:

F S P 語順 + Wackernagel 位置リズム的前倚辞: 整合的 F S P 化語順

① Slv. Oče mu jo je dal.

父は 彼に それを /助動詞/ 与える/過去分詞/

Cz. Já jsem se ti jí tu musel omluvit!

私は /助動詞/ 自分を (君に言うが) 彼女に ここで ~ねばならない あやまる

バリエーション :

② Slk. Mária na stôl by položila knihu. ▢ 条件法byの第3位置移動(小説スタイル)

マリアは 机の上に /条件法/ 置く/過去分詞/ 本を

USor. Sym hizo wupowědi da/. ▢ 過去助動詞の第1位置移動>後倚辞・独立音素化

助動詞1SG すでに 注意を 与える/過去分詞/

S-Cr. Naši su uvaženi članovi postavili jedno pitanje. ▢ 前倚辞の名詞句割り込み

我々の /助動詞/ 敬愛する メンバーは 立てる/過去分詞/ 1つの 質問を

/Naši uvaženi članovi su postavili jedno pitanje.

P. Ja powiedzia/a-by-m. ▢ 過去助動詞の人称接辞化>総合化への傾向

私は 言う/過去分詞/ /条件法//助動詞byćの1SG/

/Ja-by-m powiedzia/a. Cf. (Ja) Powiedzia/a-m.

バルカンスラブ語タイプ : F S P 語順 + 隣接要素文法的前後倚辞 : 整合的 F S P 語順

③ B. Pozasmja se tja. ▢ 非文頭前後倚辞

笑う/アオリスト3SG/ 自分を 彼女は

M. Si storil nešto? ▢ 文頭前後倚辞の許容

自分に する/アオリスト2SG/ 何か

前後倚辞重複語順 :

④ B. Dadoch mu ja knjigata na Ivan.

与える/オリスト1SG/ 彼に 彼女を・それを 本/女性名詞/-/定冠詞/ イヴァンに

M. Mu go dadov molivot.

彼に 彼を・それを 与える/アオリスト1SG/ 勧告/男性名詞/-/定冠詞/

東スラブ語タイプ : 単一 F S P 語順のバリエーション

⑤ R. Čto napisal Puškin?

何を 書く/過去(分詞)/ プーシュキンは

-Evgenija Onegina* napisal Puškin. ▢ 主観的Rh-Th語順

E. O. を

P. は

Rh

Th

Cf. Puškin napisal Evgenija Onegina. ▢ 客観的Th-Th&無標SVO語順

P. は

E. O. を

Th

Rh

(注) * 太字はIC(イントネーション・センター)要素を表わす。

前後倚辞の位置的ホモニムによる平行関係は、例えば以下のように西スラブ語タイプとバルカンスラブ語タイプ間に成立することがあるが、それは偶然の一致であり、前後倚

辞の位置を規定するそれぞれの主要語順原理に基づいている。その証拠に、要素の移動 (Th要素とRh要素の交換) の結果、互いに異なる語順が実現されることが分かる。

⑥ Cz. Bratranec se vrátil druhý den.

従兄弟は 自分を 帰す/過去(分詞)/=帰った 次の日に

Th Tr Rh

B. Bratovčedit se vărna na drugija den.

従兄弟は 自分を 帰す/アオリスト3SG/=帰った 次の日に

Th Tr Rh

↓ Tr要素のレーマ化

Cz. Druhý den se bratranec vrátil. □ Wackernagel前倚辞位置つまりFSP原理

次の日に(は) 従兄弟は 帰す/過去(分詞)/=帰った

Th DTh (Tr-)Rh

B. Na drugija den Bratovčedit se vărna. □ 動同隣接後倚辞つまり文法的原理

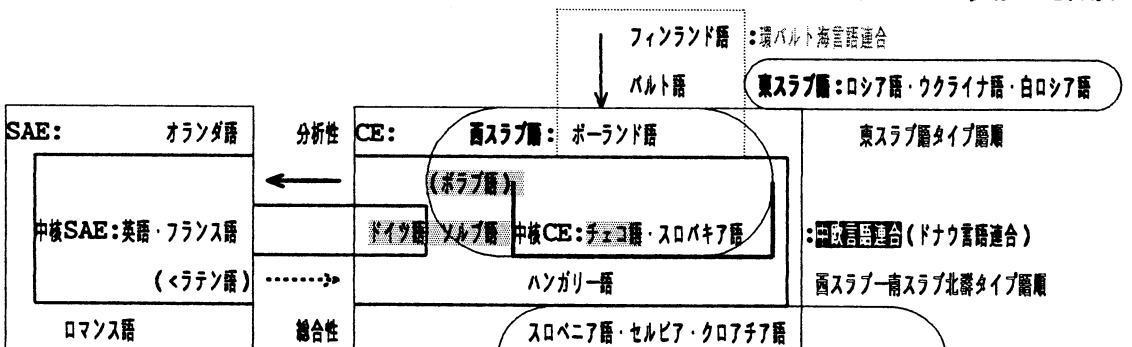
次の日に 従兄弟は 自分を 帰す/アオリスト3SG/=帰った

Th DTh (Tr-)Rh

3. スラブ諸語の語順傾向

スラブ語の語順傾向は、欧洲語マクロ類型論の観点から、特徴づけることが可能である。西スラブ語タイプを代表するチェコ語は、広く発達した(主語との一致を表示する)定動詞文によるSVO語順をFSP化させている—中欧言語連合の共有特徴CE6—。それに対し、比較的周辺に位置するポーランド語は、バリエントとしての非人称VO語順および後置形容詞・属格前置修飾を頻用するから、東スラブ語およびバルト語への接近—環バルト海言語連合現象—を示しているし、バリエントとしての枠構造の汎用により(特に従属節の)SOV語順—ゲルマン化—を発達させているソルブ語は、ドイツ語への接近を示している。南スラブ語北群を代表するセルビア・クロアチア語は、西スラブ語への接近を示すが、後置冠詞—バルカン言語連合現象—および前後倚辞重複による名詞要素のFSP語順への一致を示す隣接マケドニア語とは大きく隔っている。以下に、各スラブ語グループの語順傾向を検証する。

欧洲語マクロ類型論から見たスラブ諸語の語順タイプ分布：(本城2000より修正引用)



西歐言語連合

南スラブ語: \

バルカンスラブ語: マケドニア語・ブルガリア語

: バルカン言語連合

非スラブ語: ギリシャ語→アルバニア語→ルーマニア語

バルカンスラブ語タイプ

語順

トルコ語

(注) [影線] はスラブ・ゲルマン言語接触前綴語を示す。

欧州語のマクロ類型の特徴:

中欧言語CE連合の共有形態統語の特徴:

CE6. SVO/C 基本語順 (チェコ語: 無標SVO有標自由語順、ドイツ語主文: SVO/SvOV)

⑦ Cz: Večeře je hotovo.

S V C
Th Tr Rh

(Cf. G.: Das Abendessen ist vorbereitet worden.)

P. Gotowano wieczerze. R. Видно ты не успл. Мне зеваается (/Зеваю).

/無定動詞(述語機能の分詞中性形)文・非人称文/

/無定動詞文・非人称文/

/非人称・再帰文/

/人称文/

V O v S' V O V (s-)V

Tr Rh Tr Th Rh Th Rh (ThPr-)Tr-Rh

⑧ USor. Nan trawu syče. 父が芝生を刈っている。

▼ ▼

▼ ▼

Wona je m/oda by/a. 彼女は若かった。 Hdyž je wona m/oda by/a. ...彼女が若かった時...

▼ ▼

(Cf. G. Sie ist jung gewesen. LSor. Ako wona jo by/a m/oda...)

/複合動詞は義務的幹タイプ/

/幹なしタイプ/

3. 1. 西スラブ語: 整合的 F S P 化語順と前倚辞 2 類の要素的配列的バリエント

⑨ Cz. Dnes by ti je jistě prodali levněji.

今日は ~でしょう/条件法3PL/ 君に/単数与格/それらも/複数対格/ きっと 売る/過去分詞PL/ より安く

Slk. Boli by sme chceli.

/過去分詞/ ~でしょう/条件法/ /助動詞1SG/ 欲する/過去分詞PL/

P. Mógł-by-m mu wtedy przedstawić go na przyjęciu.

出来る/過去分詞/-/条件法/-/助動詞1SG/ 彼に その時 招待する/不定詞/ 彼を ~に パーティー/対格/

USor. Bych rad to widzia/. Cf. Njerady bych so wrócił.

~でしょう/条件法1SG/ 嬉しくて それを 見る/過去分詞/ 嬉しくなくて ~でしょう/条件法/ 自分を 帰す/過去分詞/

確認疑問文は、もっぱら文頭自立語(P. czy)のみによる場合と、無標で文末イントネーション(+倒置語順)有標で文頭自立語(Cz. jestlipak/zdali-pak)による場合と、文末イントネーションのみ(Slk.)の場合に分かれる。

⑩ P. Czy opisa/em ci jui wszystko?

~かどうか 記述した/過去分詞/ 君に 既に 全てを

名詞句の語順の傾向としては、（例えば前置詞句補語をとる）複合的形容詞句の名詞への前置は、ポーランド語に代表される〔形容詞－名詞〕枠を形成するタイプ*と、他の西スラブ語に共通の（整合的逆行支配を示す）前置詞句－形容詞－名詞語順を用いるタイプ*に二分される。

（注）* ポーランド語と同じタイプには東スラブ語・ブルガリア語・マケドニア語が、他の西スラブ語と同じタイプにはスロベニア語・セルビア・クロアチア語が、それぞれ属すると見なされる。

▼ ▼

⑪ P. bogaty w doświadczenia cz/owiek (<cz/owiek jest bogaty ~) □ 枠構造

豊かな 経験において 人(間) Th Tr Rh

Rh RhPr || (Tr-)Th □ 非整合的・非連続的(II)FSP逆行配列

Cz. na svého syna pyšný muž (<muž je pyšný ~) □ 枠無構造

自分の息子が・を 自慢の・する 男(性) Th Tr Rh

RhPr Rh (Tr-)Th □ 整合的・連続的FSP逆行配列

3. 2. 南スラブ語：西スラブ的語順の北群（スロベニア語とセルビア・クロアチア語）と文法化前後倚辞重複のバルカンスラブ群（ブルガリア語とマケドニア語）

⑫ Slv. Marija si ga je kupila. Cf. Marija bi si ga kupila.

マリヤは 自分に それを /助動詞3SG/ 買う/過去分詞/ ~でしょう/条件法/

S-Cr. Petar bi bio ostao kod kuće.

ペタル ~でしょう/条件法/ /過去分詞/ 留まる/過去分詞/ ~で 家(庭)

B. Tanja vidja Marija. Tanja ja vidja Marija.

ターニャは 見た/アオリスト/ マリヤを ターニャ 彼女を 見た/アオリスト/ マリヤが

M. Mu go dadov milivot.

彼に それを 与えた/アオリスト/ 鉛筆- /定冠詞/

代名詞の前後倚辞重複の義務的使用は、節文の動詞項の共指示性および動詞カテゴリーの他動性・完了性の表示を可能にするの—つまり前後倚辞の文法化—と平行して、それら固有のFSP機能ThPrの対動詞位置における相対的固定の結果、DTh目的語とRh目的語の位置的確定が実現される。

⑬ B. Na Ivan knigata az mu ja dadoch.

イヴァンには 本/女性名詞/+定冠詞 私は 彼に それを/女性形/ 与えた(のだ)/アオリスト1SG/

DTh Th ThPr Tr-Rh

Cf. Dadoch mu ja knigata na Ivan.

与えた(のは) 本を I. にだ

Tr ThPr DTh Rh

定性マーカーとしての後置冠詞は、位置的使用の制約を受ける不定性マーカー—つまり文

頭義務的不定冠詞的数詞 (B. edin/M. eden) および文頭無冠詞文強勢語および文末無冠詞語などと体系的対立を示し、あらゆる文位置を取りうる。その際、これら冠詞2類は、F S P 化語順の制約つまりTh-Tr-Rh配列中の各スロット固有のF S P 機能を付与される。

⑭ B. Edno dete vlez v stajata.

一人の 子供(が) 入った/アオリスト3SG/ ~の中に 部屋/女性名詞/-冠詞/

Th Tr Rh

Dete vlez v stajata. 位置的定性マーカー：文頭定性vs. 文末不定性

子供(が) 部屋に 形態的定性マーカー：定冠詞vs. 不定冠詞

Th Rh ↓

V stajata vlez dete. F S P 化語順Th-Tr-Rhへの連携

部屋に(は) 子供(が)

Th Rh

整合的F S P 化語順への傾向は、ブルガリア語よりも文頭代名詞的後倚辞を許容するマケドニア語において顕著となる。

⑮ M. Mu ja dadov knjigata na Petar. ▽ 文頭ThPr後倚辞による語順のFSP化の傾向

彼に それ/女性形/ 与えた/アオリスト/ 本/女性名詞/+定冠詞 ベータルにだ

ThPr Tr DTh Rh

(* Mu dadov knjigata na Petar.)

(注) マケドニア語の後倚辞連鎖は、西スラブ語タイプの前倚辞Wackernagel位置固定との対応を示している。

M. Jas sim mu gi zel parite.

私は /助動詞1SG/ 彼に/から それらを 取った/過去分詞SG/ お金/複数名詞/-冠詞/

DTh -ThPr- Tr Rh

Cf. Jas bev mu gi zel parite.

~でしょう/条件法/

名詞句の語順の特異なケースとして、ブルガリア語では、通常所有を表わす与格代名詞前倚辞mi/ti/mu等が名詞句頭第一強勢語の直後に置かれる。-名詞句内前倚辞-

⑯ B. dobrite mi/ti/mu prijатели

よい/親しい-冠詞PL/ /私/君/彼に・の 友人達/名詞PL/

malkoto mu verno kućence

小さい-冠詞中性SG/ 彼に・の 忠実な 犬/中性名詞SG/

3. 3. 東スラブ語：口語の主観的語順 (Rh-Th/Th-Rh-Th語順) への傾向

⑰ R. Kto napisal Evgenija Onegina?

誰が 書いた/過去(分詞)/ E. O.を

-Evgenija Onegina napisal Puškin. ▽ 客観的Th-Rh語順

E. O. は P. が

Th Rh

/Puškin Evgenija Onegina napisal. ▢ 主観的Rh-Th語順

/Evgenija Onegina Puškin napisal. ▢ 主観的Th-Rh-Th語順

/Puškin napisal Evgenija onegina. ▢ 主観的Rh-Th&無格SVO語順

確認疑問文は、もっぱら文第二位置の後倚辞(R. li)または文頭自立語(BR. Ci/Uk. Čy)により表示される。

⑩ R. Znajet li on eto?

知っている/現在3SG/ ~かどうか 彼は それを

Tr TrPr Th Rh

BR. Ci ty znaješ jago?

名詞句の語順の傾向としては、東スラブ語は、ポーランド語タイプの〔形容詞-名詞〕枠の使用が一般的である。

▼ ▼

⑪ Ukr. smišna w svojij zuchval'osti divčyna ▢ 非整合的・非連続的FSP逆行配列

おかしな 自らの體態さにおいて || 少女

Rh RhPr (Tr-)Th

指示代名詞の名詞への前置は、ポーランド語と同様に、東スラブ語では汎用されている。

⑫ R. On uveren, čto stichi eti - jeho sobstvennaja improvizacija.

彼は 確信した ~ということも 詩(が) これらの 彼の 自分自身の 即興

4. スラブ語比較語順分析 (聖書対訳テキストよりルカ伝16, 1-10)

物語冒頭の文脈独立存在文は、Cz. $V_{tr}-S_{Rh}$ (ADJ. r_h -不定 $t_h=t_r$)型つまり形容詞-名詞の非分離文末レーマ主語の語順と、B. S (不定) $_{Th}-V_{Tr}-C_{Rh}$ (ADJ.)型つまり名詞テーマ主語-形容詞レーマ補語の分離語順に大別されることが観察される。前者(西スラブ語タイプ)のバリエントP. $V_{Tr}-S_{Rh}$ (不定 $t_h=t_r$ -ADJ. r_h)は、汎用される形容詞の後置により、主語名詞句を含む一貫したF S P基本配列を実現している点が注目される。

Cz. Byl jeden bogatý člověk型: V-S(ADJ.-不定N): Slk., Slv.

P. Był pewien człowiek bogatyバリエント: V-S(不定N-ADJ.): S-Cr.

B. едный човѣкъ бѣше богатъ型: S(不定N)-V-C(ADJ.): USor., M., R.

物語中の文脈依存文は、より多様な語順とそのバリエントを持つ。4つの型に大別が可能で、Cz. S_{Th} (PRO)- V_{Tr} -ADV. D_{Th} (PP)- C_{Rh} 型つまりテーマ主語-レーマ述語語順を持つグループと、R. ADV. $_{Th}$ (REL.)- C_{Rh} - V_{Tr} -IO $_{ThPr}$ 型つまりテーマ副詞句-レーマ述語-テーマ目的語語順(主観的語順)を持つグループと、B. ADV. $_{Th}$ (REL.+後置冠詞)-IO $_{ThPr}$ (PRO後倚辞)- V_{Tr} - C_{Rh} 型つまりテーマ副詞句-テーマ後倚辞-レーマ述語語順を持つグループと、Slk. O $_{Th}$ (PRO)- V_{Rh} -ADV. D_{Th} 型つまりテーマ目的語-レーマ述語-テーマ副詞句語順を

持つグループである。整合的 F S P 基本配列を実現する Cz. 型（西スラブ語タイプ）と B. 型（バルカンスラブ語タイプ）に対して、P. などの西スラブ北辺バリエントが主観的語順（Th-Rh-Th語順）を持つ点で、周辺的な語順現象をなし、多様な主観的語順のバリエントを持つ東スラブ語タイプとの接近が推測される。

Cz. ten byl u něho udán型：S(PRO)-V-ADV.(PP)-C

P. ten był oskarzony przed nimバリエント：S(PRO)-V-C-ADV(PP)：USor., Slv., S-Cr., M.

Slk. toho obžalovali pred ním型：O(PRO)-V-ADV.(PP)

R. на котораго донесено было ему型：ADV.(REL.)-C-V-IO(PRO前倚辞)

B. за когото му бѣ донесено型：ADV.(REL.+後置冠詞)-IO(PRO後倚辞)-V-C

㉑ 16.1:

Cz. Řekl také svým učedníkům: "Byl jeden bohatý člověk, který měl správce, a ten byl u něho udán, jako by rozhazoval jeho majetek".

Slk. Povedal aj svojim učeníkom: "Bol raz bohatý človek, ktorý mal šafára; toho obžalovali pred ním, že mu márne majetok".

P. Mówi/ też i do uczniów swoich: Był pewien człowiek bogaty, który miał szafarza, a ten był oskarzony przed nim, jakoby rozpraszał dobra jego.

B. А каза и на ученицитѣ си: единъ човѣкъ бѣше богатъ и имаше пристойникъ, за когото му бѣ донесено, че разпилява имота му;

R. Сказаль же и къ ученикамъ своимъ: нѣкоторыи челоуѣкъ былъ богатъ, и имѣлъ управителя, на котораго донесено было ему, что разточааетъ имѣние его.

次に前後倚辞を含む文例を分析し、その語順と F S P 機能について観察してみる。

一般的には、所有形容詞は後倚辞を、人称代名詞の短形は前倚辞（西スラブ語タイプ）または前後倚辞（バルカンスラブ語タイプ）を構成し、その F S P 機能は前者が名詞句の Rh、後者が文の ThPr と考えられる。以下の例は命令文であるが、2つの型に大別される。USor. $V_{Tr}-O_{Rh}$ (POSS. rh-Nth=tr) 型つまり後倚辞所有形容詞-名詞の非分離文末レマ目的語を持つグループと、M. $V_{Tr}-IO_{ThPr}$ (後倚辞所有格 PRO.)- DO_{ThPr} (前倚辞 PRO)- DO_{Rh} (N+頭) 型つまり後倚辞所有格目的語-名詞の分離文末レマ目的語を持つグループである。前者のバリエント P. と S-Cr. が、後置所有代名詞により整合的 F S P 基本配列に一致しているのは、先に触れた後置形容詞の場合と同様である。注目すべきは、後者がバルカンスラブ語タイプに特徴的な前後倚辞重複（ここでは ja=признацицата）を実現している点である。特に M. に頻出するこの現象の主機能共指示性により、Wackernagel 位置への前後倚辞要素の集合が可能となり、F S P 語順が出現することになる。また、重複前倚辞代名詞の対格が、対応する（バルカンスラブ語に特徴的な）ゼロ格名詞の対格マーカー役割を果たすことより、もう一つの機能つまり主軸動詞の他動性・完了性が発

動し、ここでは語彙的に無標земнの他動・完了機能が付与されているという点で、この現象は文法化されていることが確認される。

USor. Wzmi swój listタイプ: V-O(POSS.-N): Cz., Slv., R.

S-Cr. uzmi pismo svojeバリエント: V-O(N-POSS.): P.

M. земи си ја признаницатаタイプ: V-IO(POSS.)-DO(PRO.)-DO(N+後置冠詞) /前後倚辞重複/

B. вземи расписката сиバリエント: V-DO(N+後置冠詞)-IO(POSS.)

⑳ 16.7:

USor. Potom rjekny druhemu: Ty pak, ke|ko sy do|žny? A wón dieše: Sto

brēmjenjow pšeńcy. Tomu praji: Wzmi swój list, a napiš: Wósmďiesat.

S-Cr. A potom reče drugome: a ti koliko si dužan? A on reče: sto oka pšenice.

I reče mu: uzmi pismo svoje i napiši osamdeset.

B. После рече другиму: а ти колко дължишь? Той отговори: сто крини пшеница.

И му рече: вземи расписката си и напиши: осемдесетъ.

M. Потоа му рече на другиот: а ти, колку должиш? Тој одговори: сто мери

пченица. И му рече: земи си ја признаницата и напиши: осумдесет.

5. 結論

前後倚辞の機能と位置傾向から、スラブ語の比較語順論には次の3類型が関与的となる。

i. 前倚辞のFSP化により整合的FSP化語順を示す西スラブ語-南スラブ語北群

ii. 前後倚辞の文法化によりFSP語順への傾向を示すバルカンスラブ語

iii. 前後倚辞の衰退と可動強勢によりFSP語順の多様なバリエントを持つ東スラブ語
各類型の周辺の現象は、言語接触により動機づけることも可能である(P.4-5 参照)。

参考文献:

Běličová H. et al. (1996): *Slovanská věta (Slavic sentences)*, euro-slavica: Praha

R.G.A. de Bray (1980): *Guide to the West, South and East Slavonic Languages*,

Slavica Publ.: Ohio.

Comrie, B. & G.C. Corbett (1993): *The Slavonic Languages*, Routledge: London.

本城2000: 「スラブゲルマン言語接触-中欧言語連合現象およびチェコ語・ソルブ語・ポラブ語の分析性」、*NIDABA* No. 29.

本城2001: 「チェコ語における主観的モダリティのFSP構造-第3統語面(話者態度の言語層)設定の可能性」、*Ars Linguistica* Vol. 8.

Riemsdijk, Henk van (ed.) (1999): *Clitics in the Languages of Europe*, Mouton: de Gruyter: Berlin-New York.

Siewierska, A. (ed.) (1998): *Constituent Order in the Languages of Europe*, Mouton de Gruyter: Berlin-New York.